日本語 ö の朝鮮語，アルタイ諸語との比較

——第一音節における朝鮮語Λとの対応を中心に——

大 林 直 樹

1. はじめに

有坂秀世，池上禎造による「音節結合の法則」の発見以来，日本語の ö はいわゆる陽性母音 a, u, o に対立する陰性母音として，すなわちアルタイ諸語や古い朝鮮語に見られる母音調和においての *e, *ö のような陰性の母音にあたると考えられてきたようである。そして，日本語系統研究の立場から日本語を朝鮮語やアルタイ系の言語と比較するさいにも，日本語 ö は朝鮮語，アルタイ諸語の陰性の母音と結びつけようとされてきたし，そしてまたそれは相当な成果を挙げてきた。たとえば，多くの先学らによって提起されてきた次のような比較例は，日本語 ö の一部が朝鮮語 ə やアルタイ諸語の e, ə と対応することを示していると見ることができる。

日本語 *yökö-（動詞 yöku「避ける」，yökösu「中傷する」，名詞 yökö「横」などから想定される語根[1]）：中期朝鮮語 nyək <*ńək <*ǯək「…の側，…の方」，エヴェンキ語 ǯəgin「左，左ききき，不器用」，ウデヘ語 ǯiəŋəǯə「左の」，オルチャ語 ǯuənǯi～ǯəwunǯi～ǯəuŋǯi「左の，左側」，蒙古文語 ǯegün「東，東の，左の」。

日本語 kötö「言，事」：中期朝鮮語kəs「物，事」。

日本語 *ömö「面」：中期朝鮮語 əm-či「拇」，ナーナイ語 əm「一」，オロチ語 om「同左」，ツングース祖形 *əmün[2]「同左」，蒙古文語 emün-e「前」。

日本語 opu<*öpu「負う」：中期朝鮮語 əp.「同左」，エヴェンキ語 əv-～əvu-～əvə-「背負って運ぶ」，オロチ語 əvugi-「持ってくる」。

また，次のような比較例は，日本語ö の一部が朝鮮語 ï やアルタイ諸語ö に対応していることを示すものと思われる。

日本語 tömö-si「乏しい」：中期朝鮮語 tïmïr-「稀有」。

日本語 mörö-si「脆い」：中期朝鮮語 mïrï-「同左」。

日本語 kökörö「心」：蒙古文語 kökün「乳房」，古代チュルク語 köküz「胸」，ヤクート語 köγüs「同左」。

日本語 *ökö-（動詞 öku「起きる」，「ökösu 起こす」などより想定される語根[3]）：中期朝鮮語 uh ＜*ug ＜*öge「上」，エヴェンキ語 ugï「高い」，ugïlə「上に」，ラムート語 ugəskï「上方へ」，ナーナイ語 ujə「上部」，蒙古文語 öge-de「上に」，ög-se-「川をさかのぼる」。

以上のような対応例の存在から，従来おこなわれてきた日本語ö の朝鮮語，アルタイ諸語の陰性母音との比較が一定の説得力を持つものであることをわれわれは認めなければならないと考えるし，今後もこれらの対応関係をより詳細に究明し，またできるならさらに新たな比較を追加していって音韻法則を目ざすことを当然の責務と考えている。

ところで最近，村山七郎（1987）によって，はたしてこの日本語ö の起源を朝鮮語やアルタイ諸語の陰性母音にのみ対応するものと考えていいのであろうかという，有坂秀世，池上禎造による「音節結合の法則」以来の日本語系統論者らにとっての「常識」を揺るがすような衝撃的ともいえる問題提起が行われたことは記憶に新しい。村山がこのような提起を行った理由はほかでもない。日本語のö が朝鮮語やアルタイ系の諸言語の *e，*ö などの陰性母音と対応するのみならず，陽性母音である朝鮮語 ㅏ やアルタイ諸語 o などに対応する例が見られるためなのである。すなわち，村山は，日本語ö が決して陰性母音にのみ対応するものばかりではなく，陽性母音にも対応しており，「音節結合の法則」などからその起源がすべて陰性母音に由来すると決めつけるのは誤りだ，と主張しているのである。

われわれは，この村山の重大な提言に従って日本語および関連の諸言語を再調査する必要を感じ，さっそくその作業に着手した。作業がいまだ終了していない現段階において，われわれがここで中間報告的な発表を行うに至った理由は，村山の提言が想像以上に多くの対応例によって支えられるものであることがわかったからである。

河野六郎はかつて日本語 ö と朝鮮語 ʌ の対応を語っている(河野1949，1955)。要するに本稿は，村山の提言により，河野説を蘇生させる必要性の有無を問うものである。

2. 比　　較

われわれの調査の現段階までに明らかとなった日本語 ö と朝鮮語 ʌ との対応を示す比較を以下に提示する。アルタイ諸語において同源と見なし得る形式が見出されるものも併記するが，アルタイ諸語では問題の母音が時には陽性の o，またある場合では陰性の e や ö とあらわれていることに御注意願いたい。なお，(11)(15)(17)の各例は村山（1987）においても比較されていることを付言しておく。

(1)　日本語kozoru ＜*közöru「挙る」：中期朝鮮語 kʌč-「備える」。

日本語 kozoru の ko- は高平調，朝鮮語 kʌč- は低平調を示す。音形的には十分に引きあて可能であろうと思われるし，意味的にもそれほど無理には思われない。徐在克（1980）は kʌč-「備える」を kʌči-「持つ」，kʌčʰo-「備える，蔵する」，kʌn-čʰo-，kʌm-čʰo-「蔵する，隠す」などとともに同一単語族を構成するものと見ており，kʌči-「持つ」や kʌčʰo-「備える，蔵する」についてはそう見るのが正しいであろうと思われるのだが，後に(4)で見るようにわれわれは kʌm-čʰo-，kʌn-čʰo-「蔵する，隠す」については kʌm-「(目を）閉じる」とともに日本語 kömu「込める」との比較を提起している。徐在克説も有力ではあるが，おそらく朝鮮語においては *kʌč-，*kʌm- の二つの語根の間で意味上の衝突があって，それが語形の上に何らかの影響を与えているのではないだろうか。

(2)　日本語 kötö「同じ」，götö-si「如し」：中期朝鮮語 kʌt-hʌ-「同左」，ネギダル語 gəsə「共に」，ウデヘ語 gəʰiə「同左」，満州語 gəsə「如し」。

『岩波古語辞典』によると kötö と götösi は同根とされており，従うことにする。河野六郎（1955：428）によって比較され，村山七郎（1974：223-24）によっても支持されたなじみ深い比較例である。ラムステット（Ramstedt 1949：99）はこの朝鮮語形式をラドロフの『チュルク方言辞典の試み』にあるウ

イグル語 qot, qodu「種，属」と比較している。このウイグル語形式と上掲のツングース諸語形式が同源であるとは語頭音の違いから考えにくいから，朝鮮語 kʌt-hʌ- の比較相手としてはやはり日本語 götö-si, kötö および上掲のツングース諸形式を考えるのが妥当と思われる。だが，朝鮮語ʌとアルタイoの「伝統的」対応を示していることから，ラムステットの説も記憶しておいた上でのさらなる考究が望まれる。

(3) 日本語 köpöri「郡」：中期朝鮮語 kʌvʌr「同左」。

河野六郎（1967）において指摘されたようにこれは朝鮮語からの借用語である可能性が非常に高いと思われる。

(4) 日本語 kömu「込める，覆う」：中期朝鮮語 kʌm-「(目を) 閉じる」，kʌm-čʰo-「隠す」，kʌn-čʰo-「同左」，蒙古文語 kömüg<*kömü-g「格納庫，天幕」，kömü-r-ge「倉庫，貯蔵所」。

この蒙日両語諸形式の比較はすでに小沢重男（1978：271–74）によって行われている。また，それより以前に小沢はこの日本語 kömu を蒙古文語の qamu-「集める」と比較したことがある（小沢 1968：19–21）が，その考えはおそらく母音対応に無理を感じたために放棄されたものと思われる。さて蒙古文語 kömürge であるが，小沢の説明によると -r- は deverbal noun 形成接尾辞，-ge は denominal noun 形成接尾辞であるから kömu-r-ge と分析され，*kömü- が容易に抽出されるとのことであり，kömüg についても *kömü-g と分析可能であるらしい（小沢1978：273–274)。したがって日本語ö，朝鮮語ʌ，蒙古語ö の対応を示す例と見ることができる。

なお，朝鮮語諸形式をここで比較するにあたっては，上掲の朝鮮語諸形式の語根 *kʌm- の陰性異形に関わると思われる中期語動詞 kĭmĭr-「暮れる」と，そこからの派生名詞 kĭmĭm, kĭmum「月末」をも合わせて考察すべきかと思われる。「月末」を意味するこの kĭmĭm, kĭmum がここに登場することは，当然のこととしてわれわれに日本語 tugomori「月末」を想起させずにはおかない。なぜなら tugomori は tukĭ + kömöri と分析され，その第2要素としてほかならぬ kömu の自動詞形を含むからである。まさにそのことが kĭmĭr-「暮れる」，kĭmĭm, kĭmum「月末」を kʌm- をはじめとする一連の朝鮮語諸

形式とともにこの比較の舞台で考察すべき理由である。

日本語，朝鮮語，モンゴル語の共通語根として *kVm- または *kVmV- を想定できると考える。

(5) 日本語 köru「懲る，苦い経験をして考えを改める」：中期朝鮮語 kʌr-hʌ-「選ぶ，わきまえる」，エヴェンキ語 ŋələ-「恐れる」，ナーナイ語 ŋələ-「同左」，満州語 gele-「同左」，蒙古文語 gelme-「同左」。

この日本語動詞 köru と上掲のツングース語諸形式およびモンゴル語形式との比較は村山七郎（1978：261）において試みられた。しかしその後の村山自身による日本語およびアルタイ諸語のアクセントと母音の長さの関係に関する研究の進展によると，この日本語・ツングース語間の対応例は，アクセントの点では異例に属するとされている。村山によればアルタイの長母音は日本語で高平調と出なければならないのであるが日本語 köru の kö- は低平調と推定されるのである（村山 1983：25）。

朝鮮語 kʌr-hʌ- は語根は *kʌr- と考えられ，その同一単語族を形成する多数の語詞が徐在克（1980：7）に挙げられていて参考になる。なお，kʌr- は低平調である。

(6) 日本語 köru「伐る」：中期朝鮮語 kʌz-「切る」，? kʰʌy-「採る」，蒙古文語 ker-či-「細かく切る」。

蒙古文語 ker-či- と日本語 köru の比較はすでに小沢重男（1978：267）によって行われている。日本語動詞 köru は karu「刈る」の母音交替形であることはもちろん，kiru「切る」とも当然同根と見なされるものであろう。小沢（1978：265–68）は蒙古語 kir-u-「(毛などを) 切る」，kir-γa-「(羊毛などを) 切る」，kir-ü-ge「鋸」，kür-je「くり抜くもの，シャベル」および上記の ker-či-「細かく切る」などの同一単語族を形成すると考えられる諸形式から語根 *kVr- を抽出し，それを日本語 kir-u「切る」，kur-u「刳る」，kar-u「刈る」，kör-u「伐る」などのこれまた同一の単語族に属する諸形式から抽出される語根 *kVr- に比定するという意欲的な試みを展開した。この種の試みは，なかなか期待通りには進展しない日本語や他の系統不明言語の比較研究においては，今後もっと盛んに試みられるべき研究方法の一つだといえるのではあるま

いか。

ところで，日本語とモンゴル語から小沢によって抽出された *kVr- に対応する朝鮮語はどうかというと，蒙日両言語におけるほどその語根を想定することは容易でないようである。karh「刀」，kʌz-「切る」，kʰʌy-「採る」などから抽出できる語根は現段階では *kVC- とでもしておくのが無難と思われる。蒙日両言語の *kVr- と比較し得るものが朝鮮語にも存在することは確かなようである。

(7) 日本語 söru「剃る」：中期朝鮮語 čʌrʌ-「切る，絞る」，ネギダル語 čōlī-「切り取る」，ナーナイ語 čālī-「(魚の内臓などを) 切除する」，満州語 coli-「刻む」。

これは新たな比較である。ツングース諸語に長母音が見られるのに日本語，朝鮮語の両形式は第一音節が低平調であるので，ツングース語を含めるのにためらいがなくもないが，意味的には問題がないから一応提起しておいて後考を待つことにする。

(8) 日本語 sömu「染まる」，simu「浸みる」：中期朝鮮語 sʌmʌčʰ-「浸透する」，sĭmĭy-「浸みる」，ラムート語 hĭmat-/č-「かむ，吸う」，ナーナイ語 simi-「吸い込む」，simip-「同左」，満州語 simi-「吸う，かむ」，sime-「潤う，浸みる」，蒙古文語 simed-「浸みる」，sime-「吸う」，sime「液」。

日本語動詞 sömu「染まる」と simu「浸みる」について『岩波古語辞典』は互いに母音交替形であるとしており，村山七郎 (1983) もこの両語が同源であるとの立場から上掲のツングース語，モンゴル語諸形式との比較を行っている。また，それより前に小沢重男 (1968, 223) は日本語 simu と上掲の蒙古文語 simed-「浸みる」との比較を行っている。

注目すべきは金芳漢 (1985：171–73) においての朝鮮語 sĭmĭy- の比較の舞台への登場である。そこで金芳漢は小沢らの諸説に基づいてモンゴル語，ツングース語，日本語，朝鮮語を含めての広大な比較を提起したのである。だが，そこには重大かつ深刻な問題が含まれていた。なぜなら，金芳漢によるこのような全アルタイ的比較の中に挙げられたツングース諸形式は上掲のラムート語 hĭmat-/č-「かむ，吸う」…などではなく，次のような諸形式であったからで

ある。

エヴェンキ語 imū-「油を塗る，油を溶かす」，imŋə-「脂っぽい」
ラムート語 imu-「油を塗る」
ネギダル語 imu-「同上」，imuksə「脂肪」
ソロン語 imukčə「脂肪」
オロチ語 imti-「油を塗る」，imuksə～imuhsə「油」
ウデヘ語 imoʰo「油，脂肪」
オルチャ語 simsə「同上」
オロッコ語 simurə「同上」，simutči-～simučči-「油を塗る」
ナーナイ語 niptəŋgi「油」，simu-「油を塗る」
満州語 sime-「油をしみ込ませる，油が浸みる」，imenggi「(植物の) 油」，nimenggi「(動物の) 油」

これは周知の通りツングース祖語の語頭音 *x- にさかのぼる諸形式である。金芳漢自身もこの比較がまさにこの *x のゆえにすんなりといかないことを認めている（金芳漢 1985：172)。われわれもこの *x- に来源するツングース諸形式の存在は気にはかかるが，しかしこの比較の舞台に登場すべきツングース語はやはり村山（1983）の取り上げる上掲のラムート語 hīmat-/č-「かむ，吸う」…などの諸形式が意味的にも有力であると思われる。金芳漢の提起したツングース語諸形式は「油」に関係するが，上掲の日本語，朝鮮語およびモンゴル語諸形式は「油」とは無縁のようである。

われわれの考察によって，新たに視野に入ってきたものとして中期朝鮮語 sʌmʌčʰ-「浸透する」について言及しておかなければならない。語幹末子音の相違（sīmīy- の -y- と sʌmʌčʰ- の -čʰ-）からこの二つの朝鮮語動詞 sīmīy-「浸みる」と sʌmʌčʰ-「浸透する」を同源と見なすことは上掲の日本語の二つの動詞 sömu, simu を同源と見なすことよりはるかに困難ではあるが[4]，それでも ī と ʌ の陰陽の対立する母音からなっていることは事実であるし，意味の面の近似性からも同源語の可能性は否定できないと思われる。

さて，この比較においては祖語における母音 -i- を第一音節にもつ諸形式の方がアルタイ的には広範な分布を見せている。すなわちモンゴル語，ツングース語の諸形式ははっきりと -i- を示しており，朝鮮語 sīmīy- については *simīy- >sīmīy- のような変化が推定されてもいる（金芳漢 1985：172)。

(9) 日本語 tökö「床」：中期朝鮮語 tʰʌ-「登る，乗る」，？エヴェンキ語 təgə-「坐る」，？ナーナイ語 tə-「同左」，？蒙古文語 dege-re「上へ」。

ツングース語諸形式とモンゴル語形式は別のものと思われるので両者ともに比較に出すのは好ましくないが，現在のところどちらとも判断できないため？を付したまま出すことにした。上記ツングース諸形式と日本語 tökö の比較を，日本語 ö の一部とアルタイ祖語 *e の対応を支持するものとして提起したのは村山七郎（1977：53）であった。一方，この tökö とモンゴル語 degere との比較を試みたのは小沢重男（1968：124-25）であった。この二人の日本語系統論者の見解の相違はおそらく，村山がアルタイ祖語の *d- の日本語における反映を y- と見る[5]のに対し，小沢は祖語の *d- と日本語 t- の対応を考えている[6]ところからくるものと思われる。われわれは今のところ，その正否を決定できる位置に到達していないのでそのことには触れないが，ここで新しいことは，朝鮮語の仲間がこの比較に加わったということである。この tʰʌ-「登る，乗る」は中期朝鮮語において高平調アクセントを持っていたが，このことは日本語 tökö が高・高アクセントを持つことに照らして一定の意味があると思われる。すなわち，この語は祖語の段階から二音節でアクセントは高・高であったが，朝鮮語において語中子音 -g- の消失により単音節化した後においても高＋高＝高となってもとのアクセントを止めているということができるのではなかろうか。ただ，より広いアルタイ的視野に立った村山七郎の日本語，朝鮮語のアクセント観[7]からすると，上掲のツングース諸形式をとるにしても，モンゴル語 degere をとるにしても，決して起源的な長母音を示していないため，日朝両語との対応関係における異例とせざるを得ない[8]。なお，朝鮮語において祖語の語中の -g- が消えて単音節化する現象は tʰʌ-「登る，乗る」の同音異義語 tʰʌ-「焼ける」においても見ることができる。

中期朝鮮語 tʰʌ-「焼ける」：エヴェンキ語 toγo「炎」，ラムート語 toγ「同左」，ネギダル語 tō「同左」，ナーナイ語 tawa「同左」，満州語 tabu-「点火する」。

この比較は，われわれの tʰʌ-「登る，乗る」の場合と音的環境がたいへん似ているが，異なるのはこの tʰʌ-「焼ける」の対応においては母音 ʌ がアルタイの陽性母音 o に対応しているということであり（これは従来から支持されてい

る対応)，tʰʌ-「登る，乗る」の場合はアルタイの陰性母音 e に対応しているという点である。なお，tʰʌ-「焼ける」と日本語 taku「焚く」，yaku「焼く」との比較がミラーに（1982：198–99）見える。

(10) 日本語 töpösu「通す」，töpöru「通る」：中期朝鮮語 tʌrv-「貫く」，蒙古文語 toγul- <*towūl- <*topùl-「通過する」，古代チュルク語 topul-「貫通する」，ヤクート語 tobul-「同左」。

ミラー（1981：160）は，töpö-su，töpö-ru とともに形容詞 töpö-si「遠い」をも同源語と見て上掲のモンゴル語，トルコ語諸形式との比較を試みているが，『類聚名義抄』アクセントの相違（töpösu，töpöru の töpö- は低・低，töpösi の töpö- は高・高）ゆえにわれわれとしてはさしあたり別個に扱っておこうと思う。小沢重男（1978：298）は上掲の朝鮮語 tʌrv- を除いた日・蒙・土の比較を行って，「ただ，日本語の第一音節のトは乙類で *töpor- であり，さらに古くは töpör- が予想されなくもない。しかし，逆に第一音節の tö がむしろ第二音節の p の影響で to> tö の変化を起したとも考えられ，本来的には *topor- である可能性もなくはない」と述べているが，われわれが本稿で提示した他の比較例からもうかがえるようにストレートに日本語 ö は朝鮮語 ʌ と比較し得るし，アルタイ語 o にも対応する場合があるようである。

(11) 日本語 töbu「飛ぶ」，?töri「鳥」：中期朝鮮語 tʌrk「鶏」，?nʌr-「飛ぶ」，エヴェンキ語 dəγ-「飛ぶ」，dəγi～dəγī「鳥」，ナーナイ語 dəγdə-「飛ぶ」，蒙古文語 degde-「跳ねる」。

日本語の töbu と töri が同源ではないかという考えは小沢重男（1968：248）や村山七郎（1987：5）などに見られるが，証明がされたわけではない。また，上掲のツングース語諸形式と蒙古文語 degde- の比較はポッペ（Poppe 1960：58）に見られる。もし，töbu と töri のどちらかが上掲のツングース語諸形式と比較し得るものであるなら，*deγri >*derri >*deri >*döri >töri「鳥」，または，*deγʷ-ri >*debri >*debi >*döbi > töbi「飛び（連用形）」といったような祖語からの発展を想定し得るし，その場合は日本語，ツングース語諸形式はすべて陰母音幹からなるものとして解決されることになる。ところが，朝鮮語の場合は tʌrk「鶏」にしろ nʌr-「飛ぶ」にしろ陽母音幹であるので，

ここでは朝鮮語 A の一部が陰母音に起源するのではないかという問いを発する機会を得ることになる。

なお，金東昭（1981：118–19）は朝鮮語 nʌr-「飛ぶ」をエヴェンキ語 na-「翼を振る」などと比較している。

(12) 日本語 nödö「のどか」：中期朝鮮語 nʌron-hʌ-「柔らかい，しなやか」。

村山七郎（1978：71–72）はこの nödö を南島祖語 *tə(n)duh の前鼻音化形に由来するとしている。われわれは，上掲の朝鮮語形容詞の語根と見られる *nʌron- との比較を提起する次第であるが，意味の面でいくらか問題がないとはいえない。『李朝語辞典』の nʌron-hʌ- の項には「しなやかで美しい，弱々しく柔らかい」などの現代訳が与えられている。比較の候補としての資格が問われるほどの意味の開きではないと考える。

(13) 日本語 posi <*pösi「星」：中期朝鮮語 pʌzʌy-「まぶしい，照る」，?pyər「星」，エヴェンキ語 hōsīn「火花」，ナーナイ語 posī「同左」，満州語 foso-「輝く，照る」，蒙古文語 očin <*počin「火花」，?odun <*podun「星」。

???エヴェンキ語 osīkta「星」，ネギダル語 ōsīkta「同左」，ōsīxan-「火花が飛ぶ」，ナーナイ語 xosakta，xosīkta「星」。

この中期朝鮮語 pʌzʌy-「まぶしい，照る」とエヴェンキ語 hōsīn 以下の「火花」の意味するツングース諸形式を比較したのは金東昭（1981：22–24）であった。

日本語 posi <*pösi（ここで乙類の ö を推定するのは奄美方言形 husi から）は古くから多くの先輩系統論者らにより周辺の諸言語と比較されてきたが，今日にいたるまでだれもが納得できるような語源は提示されていない。これはとりもなおさずこの posi「星」の比較がアルタイ的にいかに困難なことであるかを物語っていると言えそうである。

現代語の表面上の類似性から，エヴェンキ語 osīkta「星」，ナーナイ語 xosīkta「同左」などからベンツィング（Benzing 1955：23）によって *xōsɪ-kta（-kta は接尾辞）と再構されているツングース諸語の「星」を意味する諸形式に最初に目がいってしまうのはいたし方ないことであろうが，このツングース祖形の頭音 *x- と日本語 posi の p- との相違ゆえにこの比較は有力なものと

はなり得ていない。ツングース祖語には *p- が存在したと見られるから，*x- と日本語 p- の比較には困難があると見られる。ただ，ツングース祖語 *x- に関する問題が未だ完全に解決されたわけではないし(9)，日本語 p- のすべてが *p- に来源するものと現段階で決めつけてしまうのもせっかちだと思われるので，このツングース諸形式には ??? を付して出しておいた次第である。これらの「星」を意味するツングース語諸形式において，意味の面で注目に値するのはネギダル語とエヴェンキ語である。ネギダル語には「星」を意味する ōsīkta のほかに ōsīxan- という同根動詞があって「火花が飛ぶ」を意味する。また，エヴェンキ語においても，ポドカメンノ・ツングース方言などに動詞 ōsɪn- があってこれも同じ意味である。また，エヴェンキ語オレクミン方言の同源語 ōhīlta，ラムート語アルマン方言の同源語 ōšikat は「稲妻」を意味している。ツングース語の「星」をあらわす語が主として北ツングース諸語においてこのように意味的な広がりを示しているのは，以下に見るツングース祖語 *pōsīn「火花」に由来する諸形式との語形上，意味上の衝突が原因ではないかと考えられる。

ツングース諸語において「火花」を意味する諸形式は *pōsīn に由来するもので，現代諸語における意味は「火花」およびその同根動詞の「火花が散る」などが中心であるが，そのほかにもエヴェンキ語北バイカル方言 ōhılta の「稲妻」，ネギダル語下アムグン方言 xosīn-čā の「(熱した) 炭の小片」などが見られるが，なんといっても朝鮮語にとって注目されるべきは満州語 foso-「(日光・燈火などが) 輝く，照る」であろう。中期朝鮮語には pʌzʌy-「まぶしい，照る」のほかに pʌzʌ-wamʌy-「まぶしい」という合成用言がある。ツングース祖形 *pōsīn と中期朝鮮語 pʌzʌ- または pʌzʌy- から *pōsī が立て得るか，あるいは *pōsoy とでもしたほうがよいか現段階では決められないが，いずれにしろ日本語 *pösi「星」にたいへん近い。難点があるとしたらそれは意味の問題であろうが，たとえば上でも見たように，ツングース祖形 *xōsīkta「星」に由来する現代諸語形に「稲妻」「火花が散る」を意味するものがあることなどからも，日本語 *pösi をツングース祖語 *pōsīn「火花」，中期朝鮮語 pʌzʌ(y)-「照る，まぶしい」と比較することは許容されるであろう。

蒙古文語 oči「火花」がここに加えられるべきであることを主張したのは小沢重男 (1968：139) である。小沢は中世モンゴル語でこの語の頭音 *h- が実証されないとしつつも，ツングース語との同源は疑問の余地がないことから，中世モンゴル語 *hoči(n)「火花」を考えているようである。意味の問題につ

いては，「意味の上では（星）と（火花）であるから，幾分のひらきがあるが，これは比較を不可能にする程の違いではあるまい（小沢1968：140）」としているが，上述したツングース祖語 *xōsīkta に由来する現代諸形の意味の広がりなどを小沢が考慮していたらもっと積極的な主張をしたであろう。なお小沢は中世モンゴル語 hodun「星」と日本語 posi との比較の可能性についても触れている。小沢によると hodun は ho-dun と分析されるという（小沢 1968：140）。

以上見てきたように，日本語 posi <*pösi「星」はツングース祖語の「火花」を意味する *pōsīn，中期朝鮮語の「まぶしい，照る」を意味する pʌzʌ(y)-，およびモンゴル語の「火花」を意味する *poči(n) などと結びつく蓋然性がもっとも高いのではないかとわれわれは考える。上に？を付して掲げた中期朝鮮語 pyər「星」，蒙古文語 odun <*podun「星」については，現段階では結びつけるすべがないが[10]，まったく排除もできない。??? を付したツングース祖語 *xōsīkta「星」についてはほとんど結びつかないと考えてよいのではなかろうか。皮肉なことに，日本語 posi <*pösi は「星」の意味をもつ語とは結びつかず，「火花」「火花が散る」「光線」「照る」「まぶしい」などの意味をもつ語と結びつきそうである。あるいは，日本語 *pösi も元来は「光り輝くもの」とかいった意味を持っていたのではないかなどと考えて見る。

(14) 日本語 pösö-si「細い」：中期朝鮮語 pʌtʰ-「短い，かすか」，中世モンゴル語 hüčüken <*pöčüken「小さい」，蒙古文語 öčüken <*pöčüken「同左」。

蒙日両形式については村山七郎（1977：52）によって比較されている。朝鮮語 pʌtʰ- をこれに加えることは許容され得るであろう。ただ，日本語 ö に朝鮮語 ʌ が対応し，それにアルタイの ö が対応する例はたいへん少ないようで，本稿では(4)およびこの(14)の 2 つの例のみである。

(15) 日本語 poru <*pöru「掘る」：中期朝鮮語 pʰʌ-「同左」，蒙古文語 erü- <*per-ü-「同左」。

この比較は村山七郎（1987：5）によって提起された。村山は奄美方言で「掘る」の連用形が huri とあらわれることから，より古い日本語形式として第一

音節に乙類 ö をもつ *pöri を推定している。対応するツングース語形式は見られないようであるが，蒙古文語 erü-「掘る」がこの比較に加えられるべきかと思われる。すでに小沢重男（1978：300–01）はこの erü- と日本語 poru を比較しているが，erü- が *per-ü- に由来するという根拠となっているムカディマット・アル・アダブの辞書に見える hergūr（灌漑用具）の小沢による分析は信頼できるものと思われる。

(16) 日本語 pöröbu「亡ぶ」：中期朝鮮語 pʌzʌ-「砕く」。

この比較はわれわれによって初めて提起されるものであるが，語中子音の問題（日本語 -r- と朝鮮語 -z- の対応をさらに多くの例で支えられるか）など今後に待つべき点が多いので単に提起するだけとする。

(17) 日本語 mo <*mö「藻」：中期朝鮮語 mʌr「同左」。

宋敏（1977：160）はこの比較を朝鮮語 -l/r：日本語 -ø（ゼロ）の対応を実証するものとして引用しているが，そこでは日本語 mo の母音 o の甲乙が示されていなかった。村山七郎（1987：5）は奄美方言でこの語が mū とあらわれることに根拠して *mö を再構し，この比較に一層の信びょう性を与えた。このことは(13)(15)の比較でも見た通りであるが，日本語諸形式の古形を推定する上で奄美方言形がいかに重要かを示している。

(18) 日本語 mötö「本」：中期朝鮮語 mʌt「嫡，伯」。

河野六郎（1949）によって提起された比較である。古代日本語 wosa「長」が比較され得る可能性もなくはないと思われるが，wosa の -o- は「音節結合の法則」からいって甲類であったと思われるので，本稿では mötö 説に従っておくことにする。

(19) 日本語 momu <*mömu「揉む」：中期朝鮮語 mʌni-, mʌnči-「触れる」，エヴェンキ語 moni-「揉む」，ネギダル語 monŋi-「同左」，オロチ語 moŋči-「同左」，満州語 monji-「同左」。

朝鮮語 mʌnči- をツングース諸形式のうちの満州語 monji- のみと比較した李基文（Ki-moon Lee 1958）を除けばこれら関連諸言語における諸形式は本稿において初めて比較の舞台に登場するようであるが，十分に比較に耐えられるものと思われる。日本語に乙類母音をもつ *mömu の推定が許されるのは，奄美方言でこの動詞が mumi（連用形）とあらわれるためである。

日本語においてこの *mömu よりもさらに古いある段階において *mömu <*mönu-，すなわち頭音 m- の同化作用による -m- <*-n- の変化を推定しなければならないのであろうか，あるいはまた，朝鮮語やツングース語において mʌni- <*momi-（朝鮮語），moni- <*momi-（ツングース語）のようないわゆる異化を推定すべきなのであろうかが問題とならざるを得ないが，ツングース語諸形式を検討するなら前者の可能性（日本語における *mömu <*mönu）の方が高いのではないかと思われる。すなわち，ツングース諸語の「揉む」を意味する諸形式，エヴェンキ語 moni-，ネギダル語 monŋĭ～moŋnĭ-，オロッコ語 monʒĭ～monʒŭ- などを考慮するならば，エヴェンキ語 moni- はその語中子音群を簡単化したものだと推定されるためである。日本語 *mömu はそこから同化によってさらに一歩形を変えたと見ることができるのではないだろうか。

(20) 日本語 yörödu「万」：中期朝鮮語 yərəh，yərə～yəra <*yʌra「諸」。

この朝鮮語諸形には語末音 -h をもつものともたないものがあるが，-h をもつものは名詞的に用いられ，もたないものは連体詞的に用いられる。

yərəh-i ta 讃嘆 hʌ-nira（法華経諺解 1：36）
諸人が 皆 讃嘆した
yərə sarʌm-ʌy nʌs（金剛経三家解 2：2）
諸　人の　顔

なお，yəra は母音調和に適合していない形であるためより古くは *yʌra にさかのぼるとする説は李基文（1977：139）などに見られる。すなわち，yərə <yəra <*yʌra の変化を経たものと見られ，それゆえにこの比較が本稿で論じる対象となり得るのである。

3. おわりに

以上見てきたように，日本語の陰性母音といわれてきたöは，第一音節において朝鮮語の陽性母音Aと対応する例が少なからず見うけられる。われわれが本稿で検討した比較は20例にのぼるが，今後の継続調査によってさらにこの数はさらにいくらか増やされるのではと思われる。

これまで日本語öはアルタイ諸語の *e や *ö などに由来する陰性母音に対応するものと考えられてきたが，われわれの今回の調査の途上での中間報告からだけでも，それはもう一度厳密に検討される必要があると言わなければならない。もちろんわれわれは共時態たる上代日本語における陰性のöを否定しようというのではない。ただ，öの起源が必ずしも陰性にのみ由来すると決めてかかることはできないのであって，陽性起源のものも少なからず存在するのではないかと思われるということである。1988年8月27日に村山七郎先生は筆者と会見されたさいに，上代日本語の母音調和は祖語のそれを直接に受けつぐものではなくて，陰陽の母音の合流などから一度乱れたものが上代日本語またはそれ以前のある段階において新しく「再現」されたものではないか，といった趣旨のお話しをされたが[11]，乙類öがこのように祖語の陰性の *e, *ö のみならず朝鮮語Aなどにも対応しているということは，この先生の御説を支持するものと思われる。

しかし，問題は複雑なことこの上ない。われわれが見た比較例にしても，そのうちで朝鮮語以外のアルタイ諸語の対応例のある場合を見ると，アルタイ諸語では(7)(10)(13)(19)は陽性のoで出ているものの，(2)(5)(6)(9)(11)(15)は陰性のeと出ており，さらにöも(4)(14)の2例に見られるのである。したがって，日本語öに朝鮮語Aが対応する場合でもそれがアルタイで陰性母音で出ている例においてはその陰陽の判断を保留しなければならなくなってしまう。おそらく，朝鮮語A自体にも単純ではない歴史が秘められているためにこのような入り組んだ対応を示すのだと思われるが[12]，これは今後の課題としておきたい。

ともあれ，日本語öと朝鮮語Aの対応だけは動かないものと思われる。これが本稿で確認したことであり，アルタイ的には対応形式を提起するだけにとどまった。今後はさらに比較例を増やすことが望まれるのは当然であるが，日本語内でのöの位置について，また朝鮮語内におけるAの位置についても，それぞれの内的研究の深化が要請されよう。

注

（1） *yökö- の抽出は村山七郎（1979：216）による。
（2） ツングース祖形はベンツィング（Benzing 1955：101）による。
（3） *ökö- の抽出は村山七郎（1979：215）による。
（4） たとえば徐在克（1980）はこの両語を同一単語族に属するものとは見ていない。
（5） たとえば村山七郎（1977：49–54）の比較には日本語 y- とアルタイ諸語 d- の対応を示すものが数例含まれている。
（6） 小沢重男（1979：88）参照。
（7） 村山七郎のアクセント観を簡単に要約するならば，日本語および朝鮮語の高平調はアルタイの長母音に対応し，日本語および朝鮮語の低平調はアルタイの短母音に対応する，ということである。村山七郎（1983，1984）などに詳しい。
（8） ただ，朝鮮語 t^{h}ʌ- は -g- の消失によって祖語のある段階において長音化していたために高平調を示すという見方は可能ではある。
（9） ツングース諸語の *x- についての諸説は金芳漢（1985：167–73）に簡潔に紹介されている。
（10） 村山七郎（1978：241–43）は朝鮮語 pyər を「i の折れ」に由来するものとして朝鮮祖形として *bita をたて，それを「星」を意味する南島祖形 *bituhən と比較している。
（11） 先生のお話を完全に記憶しているわけではないので，伝え誤りがあれば筆者の責任である。
（12） 福田昆之（1975：247–51）は朝鮮語とアルタイ諸語の数詞の比較などに基づいて朝鮮語の母音 a，o，ʌ のほうを陰性母音 ə，u，ï のほうを陽性母音と見ている。

参考文献

小沢重男　古代日本語と中世モンゴル語——その若干の単語の——比較研究，風間書房 1968.
———　モンゴル語と日本語，弘文堂，1978.
———　日本語の故郷を探る　——モンゴル語圏から——，講談社，1979.
金東昭　韓国語의 TUNGUS 語의　音韻比較研究，晩大論文集，韓国大邱，1981.
金芳漢著　村山七郎監修，大林直樹訳，韓国語の系統，三一書房，1985.
河野六郎　日本語と朝鮮語の二三の類似，八学会連合編，人文科学の諸問題——共同研究，稲，1949.
———　朝鮮語，世界言語概説下巻，研究社，1955.
———　古代の日本語と朝鮮語，ことばの宇宙，1967.
徐在克　中世国語의　単語族研究，韓国大邱，1980.
宋　敏　韓日両国語音韻対応試考，——国語 1 과 0 를　中心으로，国語学論文選10，比較研究，韓国ソウル，1977.
福田昆之　日本語の系統論的研究，FLL，1975.
Benzing, J.　Die tungusischen Sprachen. Wiesbaden, 1955.

Poppe, N. Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Teil 1. Wiesbaden, 1960.
ミラー・R・A著　西田龍雄監訳，近藤達夫他訳，日本語とアルタイ諸語，大修館書店 1981.
――― 村山七郎他訳，日本語の起源，筑摩書房，1982.
村山七郎　日本語の研究方法，弘文堂，1974.
――― 日本語の成立，講座国語史1，国語史総論，大修館書店，1977.
――― 日本語系統の探究，大修館書店，1978.
――― 日本語の誕生，筑摩書房，1979.
――― 原始アルタイ語の母音の長さの日本語における reflex，京都産業大学国際言語科学研究所所報，第5巻第1号，1983.
――― 日本と韓国語との関係，新しいアプローチの試み，えとのす24号，1984.
――― 近頃考えたこと　LCJ 第9回研究会（於：順天堂大学）での講演レジメ，1987.
Ramstedt, G. J. Studies in Korean Etymology. Helsinki, 1949.
Lee, K (李基文). A comparative study of Manchu and Korean. Ural-Altaische Jahrbücher, XXX, Heft 1-2, 1958.
李 基 文　国語音韻史研究，韓国ソウル，1977.